

宮崎のNPOに助成金

光と愛の事業団 在宅がん患者支援

読売光と愛の事業団が今年度始めた「がん患者在宅療養支援事業」で助成団体の一つに、県内から終末期の患者やその家族の支援に取り組む認定NPO法人「ホームホスピス宮崎」（宮崎市）が選ばれた。法人の市原美穂理事長（74）は「助成を機に、患者さんがその人らしく過ごせるよう活動をさらに進めていきたい」と話している。

（平島さおり）

「その人らしい暮らしを」



活動について語る市原理事長

ホームホスピス宮崎は1998年、医師や看護師、薬剤師らが設立。当時、末期のがん患者向けの緩和ケア病棟は多くなく、患者らが自宅で安心して過ごせる環境づくりなどを行った。

活動の中で重いがんなどと向き合う患者らの「自宅で最期を過ごしたいが、介護する人がいない」といった悩みを医師を通じて聞いた。こうしたことをきっかけに2004年、宮崎市内の一軒家を借り、終末期の患者らが暮らす「かあさんの家」を開設した。患者ら

の「家」になればとの思いを込めた施設で、看護師やヘルパーらが患者らの生活などをサポートする。

患者が自宅にいるような雰囲気づくりを心がけ、家族の人が泊まって大事な人の最期をみとれるようにした。当時全国でも珍しい取り組みで、その後同様の施設は県外でも増えた。現在、同法人が事務局を務める全国ホームホスピス協会には県内外の43法人が加盟する。

ホームホスピス宮崎が現在、宮崎市内で運営するかあさんの家は3か所に増えた。昨年以降、新型コロナウイルスの影響で入居する患者と家族らの面会は難しくなったが、感染対策を徹底し、家族らができるだけ大切な人と一緒に過ごせるよう心がけている。

今回受けた助成金50万円は、災害などに備え、ポータブルバッテリーの購入費

などに充てた。

10月には重度の心身障害がある子どもらの一時預かり施設も宮崎市内に設ける予定という。市原理事

長は「これからも赤ちゃんから高齢者までが心穏やかに暮らせるよう活動を続けていきたい」と話している。

福岡の支援団体に助成

ファイナルステージを考える会



ポーセラーツの作業を楽しむ患者ら

がん患者の在宅療養 光と愛の事業団

読売光と愛の事業団が2020年度から新たに始めた「がん患者在宅療養支援事業」で、県内からは、がん患者の終末期を支援するボランティア団体「ファイナルステージを考える会」（福岡市）が、50万円を受け取る助成団体に選ばれた。

（島田愛美）

会は、末期がんで余命半年の告知を受けた福岡市の小山ムツコさん（2000年に57歳で死去）が、市内の医師ら有志とともに1994年に設立した。

当時、末期がん患者は病床で「受け身」的に過ごすのが一般的だった。しかし、小山さんは「残された日々を自分らしく生きる」ことを重視した。講演や講座を通じて、自由に食事や旅行などを楽しむ暮らしを提案。

現在、会の代表世話人を務める岩崎瑞枝さん（64）ら賛同者の輪が広がった。小山さん死去後、会は在宅治療・療養中の末期がん患者とその家族の支援を中心に活動している。

メンバーは、世話人でもある清水クリニック（福岡市南区）の清水大一郎院長の患者宅を訪問。診療の合間に、患者はもちろん、看病疲れもある家族の手足をマッサージしながらよもやま話に花を咲かせ、相談も

受ける。体調が安定している患者には、クリニックで週一回開く「デイホスピス」への参加を提案する。

今年13日のデイホスピスには、3人の患者らが参加。メンバーは、治療の影響でのみ込むのが苦手な患者も食べやすい「にゅうめん」を作り、白磁の器に転写紙を貼って飾り付ける「ポーセラーツ」の作業を紹介。談笑しながら、楽しみを共にした。

患者の野崎恭子さん（76）は家族を不安にさせないよう、自宅ではつい、「大丈夫」と繰り返してしまうという。「デイホスピスでは悩みも相談できるので心が軽くなる」と笑顔を見せた。新型コロナウイルスの影響で、会の活動は現在、休止状態だ。訪問診療の付き添いは約1年前からできなくなり、デイホスピスも緊急事態宣言発令の翌日の今月14日から取りやめた。岩崎さんは「活動を再開できたら、助成金を活用して引き続き、患者さんや家族を支えられるよう、頑張っていきたい」と話している。

2021年(令和3年)1月31日(日曜日)

愛媛

松山のNPOを助成

がん患者在宅療養支援

読売光と愛の事業団が今年度始めた「がん患者在宅



メンバーが月1回集まる例会(昨年8月、松山市で)＝愛媛がんサポートおれんじの会提供

療養支援事業」の助成先に、県内からは、松山市のNPO法人「愛媛がんサポートおれんじの会」が選ばれた。2008年の設立時から活動する理事長の松本陽子さん(55)は「在宅療養に絞った助成は、本当にありがたい。新型コロナウイルスの感染防止に気をつけながら、患者への情報提供や、サポートする人たちの研修を行いたい」と話す。

事業は、進行がんなどのため自宅で生活しながら療養する患者や、その家族への支援活動に取り組むボランティア団体を対象に助

成。がんの経験者や、家族らでつくる「おれんじの会」には50万円が助成された。全国で計4団体が選ばれている。

会は、「患者や家族が悩みを話し合える場」と設立され、09年、NPO法人に。県の助成を受け、松山市末広町に無料の「町なかサロン」を開設して患者らの話を聞き、悩みや不安、苦しみを分かち合う場になっている。現在の会員は約100人。毎月第1日曜に例会を開き、情報交換している。

サロンを訪れた人からは「医療者の情報を得ることができて助かった」「同じ経験をした人に話すことができて少し、気が楽になった」といった声が寄せられ

ているという。

事業団の助成を受け、会では、在宅緩和ケアに関するミニセミナーや交流会の開催、人生の最終段階にさしかかった患者や、家族への

対応に特化したサポートができる人の養成に取り組む。松本さんは「患者の不安や孤独感はなくなることはないが、体験を共有し、ともに考えることで、

少しでも軽くしたい」と言う。

サロンは平日午前10時～午後4時。予約不要。問い合わせは、町なかサロン(089・997・7638)。

札幌「葉っぱの会」に助成金

光と愛の事業団 在宅がん患者支援

読売光と愛の事業団が
2020年度に始めた「が
ん患者在宅療養支援事業」
の助成先が決まり、道内



助成先に選ばれた「葉っぱの会」代表の竹生教授（27日、札幌市白石区で）

では在宅ホスピスボランティア「葉っぱの会」（札幌市白石区）が選ばれた。新たなボランティアの養成や、患者を訪ねる費用などに、計30万円が支給された。

同会は、在宅療養支援を専門に行う診療所に事務局を置き、亡くなるまでの期間を自宅で過ごす患者とその家族の生活を、無償で支援している。結成は2014年で、患者の会話や将棋の相手、外出への同行のほか、家族が留守にする際の

患者の見守りなど、活動内容は幅広い。

代表の竹生礼子（北海道医療大教授、61）によると、患者や家族は、社会保険が適用されない外出支援や見守りを我慢しがち。しかし、

「春にはお花見がしたいなど、患者にも人としてのあたりまえの願いがある。家族にも持病の通院や息抜きなどの機会が必要で、ボランティアの力が求められている」という。

同会ではこれまで、活動費を全てメンバーで自己負担していた。竹生教授は「取り組みが認められ、うれしい。助成金は会の持続的な活動のために使いたい」と話した。